



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 地元における雇用の潜在性と進路指導のギャップ ; 夕張を担う地元企業・機関の調査から  |
| Author(s)        | 窪田, 玲奈; Kubota, Rena  |
| Citation         | 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 117, 113-130  |
| Issue Date       | 2012-12-26  |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.117.113">https://doi.org/10.14943/b.edu.117.113</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/51023">https://hdl.handle.net/2115/51023</a>           |
| Type             | departmental bulletin paper   |
| File Information | Kubota.pdf  |



# 地元における雇用の潜在性と進路指導のギャップ

——夕張を担う地元企業・機関の調査から——

窪田玲奈\*

【キーワード】 財政再生下の自治体, 人口流出, 地方都市における雇用,  
進路指導, 住宅問題

## 【目次】

- I. はじめに
  1. 問題意識
  2. 夕張市の概況
    - (1) 財政再生下の自治体
    - (2) 少子高齢化の中の人口流出
- II. 夕張高校の進路指導
  1. 市内に1つの夕張高校
  2. 夕張高校の生徒の進路
  3. 外向きの進路指導方針
- III. 地元における雇用
  1. 農業部門(メロン農家)
    - (1) 農業協同組合への聴き取り(2010.06.)より
    - (2) 夕張メロン生産組合, 青年部の存在
  2. 福祉部門
    - (1) 空知における福祉職に就く人材の養成—K町立介護福祉学校—
    - (2) 福祉事業所—特別養護老人ホームR園を事例に—
  3. 企業部門
    - (1) 市内における企業
    - (2) 雇用の潜在性
- IV. 被雇用者のための生活環境の改善の必要性—住宅問題、税負担—
- V. おわりに
  1. 高校の進路指導方針と地元雇用の潜在性のギャップ
  2. 地方における高校教育への示唆

\*北海道大学大学院教育学院博士後期課程(学校教育論講座・生徒指導論)

## 1. はじめに

### 1. 問題意識

筆者はここ数年、北海道夕張市の若者を対象とした調査研究を行っている。夕張市で暮らす若者の地元への愛着は総じて高いものの、進学や将来の仕事を考えて、多くの者が高校卒業を契機として、市外、その多くは北海道で1番大きなA市へと出ていく<sup>1</sup>。しかしながら、地元に残っている若者や彼・彼女らを受け容れている地元企業の担当者の方への調査を行う中で、高校生や高校への調査とは少し異なる側面が見えてきた。

そこで本稿では、①夕張市における雇用の潜在性、②地元企業の雇用と進路指導側の認識のズレ、③進路指導における、「ノン・エリート」への視点の必要性について考察していく。地元で就職をしたいが求人がなく、市外へ出ざるを得ないという高校側の認識がある一方、地元企業は、できるだけ地元である夕張市の若者を受け入れたいと考えているという事実のギャップがある。また、高校は良心的な想いから外向きの進路指導方針を取っているが、地元へ残る、戻るといった進路のあり方について違った角度からの支援も必要なのではないか。

佐々木(2009)は、職業教育において重視すべき点として「生まれ育った地域で就職できるようにすることの重要性」について指摘し、「ノン・エリートの若者にとって、地域で生活していくことは当然の権利である。人とのつながりは彼らにとって唯一とっていい資本であり、地元の就職にこだわることをけっして甘えだとはいえない。」「地域で暮らすことが、彼らの職業的発達の重要な基礎であることを再認識しなければならない。」と述べている<sup>2</sup>。夕張の若者にとっても、地元におけるつながりは、生活を送る上で重要な役割を果たしている<sup>3</sup>。中西(2004)のいう「第二標準」、近年着目されてきている「ノン・エリート」という視点を入れつつ、地元企業、機関への聴き取り調査<sup>4</sup>から明らかになってきたことについて考察していく。

## 2. 夕張市の概況

### (1) 財政再生下の自治体

2006年6月20日、「自力での夕張市の財政再建は困難であると判断をし、地方財政再建促進特別措置法の適用による法のもとでの財政再建に取り組む決意をしたところでございます。」という当時の市長、後藤健二氏による市議会での発言に始まり、夕張市は財政再建団体入りへ向けた具体的なプロセスを踏んでいくこととなった。後藤市長による発言があった時点で、市の負債は632億円という莫大な額に上っていた<sup>5</sup>。2007年3月6日には、財政再建団体に指定され、平成18年度～平成36年度までの18年間が計画期間として設定され、赤字解消額は353億円とされた<sup>6</sup>。

夕張市はかつて炭都として栄えたが、石炭から石油への「エネルギー革命」を背景に、石炭産業は斜陽を見せ始める。1963年から1987年にかけて第1次～第8次石炭政策が採られ(第8次石炭政策は84年～91年)、「国内炭の切り捨て」が行われていく中、夕張でも閉山が相次ぐことになる。炭鉱事故があったことも大きく影響しているが、三井グループの北炭(北海道炭礦汽船)は1982年に閉山している。北炭は、「炭鉱労働者の退職金は払えない」と、社有地の買い取りを夕張市に申し出ており、この時、従業員への労務債(退職金を含む未払い賃金)は33億5千万円に上っていた。北炭の申し出を受け、市は26億円で社有地と社宅の買い取り

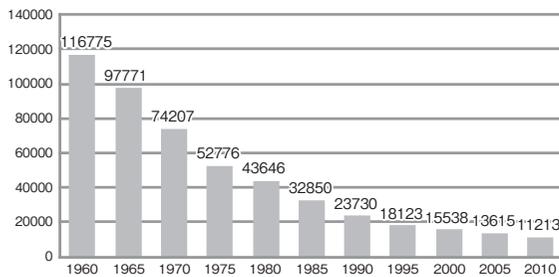
に応じたものの、北炭は労務債を踏み倒して夕張を去っている<sup>7</sup>。この他に、水道事業、炭鉱病院（後の市立病院）なども市が引き継ぐことになり、閉山後の対策費用が市に押し付けられることとなった。閉山後の処理費用は、580億円に上り、330億円を地方債の発行で負担している。1982年12月21日の北海道新聞朝刊では、当時の夕張市の財政を「財政再建団体への転落必至」と報じている。

さらに、旧産炭地域の疲弊への対処として敷かれていた産炭法（産炭地域振興臨時措置法<sup>8</sup>）は、2001年度で期限切れ失効となっている。1999年8月5日には、産炭地域振興審議会から「産炭地域振興対策の円滑な完了に向けての進め方について」の答申が政府に提出されている。その中で「産炭地域全体としては、石炭鉱業の構造調整という特殊な要因による影響の是正という産炭地域振興対策の目標を概ね達成しつつあるものと認められる」とし、産炭法を当期限りで失効させ、失効後は地方自治体などの自主的対策に委ねることとされた。「産炭地域の中には、今なお、過去の閉山・合理化の影響を受け、人口の流出、財政悪化等多数の問題を抱え、社会的・経済的に極めて厳しい状況にある」という要望決議が2000年12月6日に出されているものの、産炭法は2001年度を以て失効し、5年間の激変緩和措置も2006年度が最終年度となり、「産炭地の切り捨て」が行われることとなった。「夕張市の財政破たんの問題は、北海道の一つの小都市が財政的に躓いたという、一地方のローカルな話題ではない。」「夕張問題は、夕張だけの問題ではない。」<sup>9</sup>という指摘の通りである。

(2) 少子高齢化の中の人口流出

炭鉱が栄えていた当時は、10万人を超えていたこともある人口だが、2012年の3月末で人口10,471人（5,789世帯、男性4,915人、女性5,556人）と、約10分の1までに減少している（図表1）。他の過疎地域と同じく漸減していた人口だが、財政破綻後の人口減少率は以前よりも大きくなっている<sup>10</sup>。国立社会保障・人口問題研究所（東京）の推計に基づき、再建計画の終了時の夕張市の人口は約7,300人と見込まれているが、働き手の流出加速は一切考慮されていない。実際には、推計の2倍のペースで人口が減り始め、計画初年度から誤算が生じているという<sup>11</sup>。年齢別の人口を見てみると、0～14歳までの人口が719人（6.6%）、15～64歳までの人口が5,417人（49.6%）、65歳以上の人口が4,786人（43.8%）と、超少子高齢の町であることがわかる（図表2）。

図表1 夕張市の人口



※各年3月末現在。夕張市役所HP（行政区・年度別住民登録人口）参照・筆者作成

図表2 夕張市年齢別人口

| 年齢     | 人口    | 構成比   |
|--------|-------|-------|
| 0～14歳  | 719   | 6.6%  |
| 15～64歳 | 5417  | 49.6% |
| 65歳以上  | 4786  | 43.8% |
| 総数     | 10922 |       |

※平成22年国勢調査結果統計表参照・筆者作成

## II. 夕張高校の進路指導

### 1. 市内に1つの夕張高校

夕張市にはかつては市内に5校の高校があったが、人口減少に伴い、現在は夕張高校の1校のみとなっている。ここ5年間は、各学年2クラスずつとなっているものの、平成19年度から平成23年度にかけて、在籍者数は減少してきている(図表3)。

夕張高校に在籍している生徒は、全員夕張出身の者である。中学校から約1割程度の生徒が市外の進学校に進むものの、交通機関の問題もあり、ほとんどの生徒が市内にある夕張高校へ進学する。そのため、学力の幅が広い、地方の進路多様校となっている。

図表3 夕張高校の生徒数(普通科全日制・各学年2クラスずつ)

| 年度      |      | 1学年 | 2学年 | 3学年 | 計   |
|---------|------|-----|-----|-----|-----|
| H19.05. | 学年全体 | 67  | 77  | 77  | 221 |
|         | 男子   | —   | —   | —   | 106 |
|         | 女子   | —   | —   | —   | 115 |
| H20.05. | 学年全体 | 57  | 68  | 72  | 197 |
|         | 男子   | —   | —   | —   | 106 |
|         | 女子   | —   | —   | —   | 91  |
| H21.05. | 学年全体 | 57  | 57  | 68  | 182 |
|         | 男子   | —   | —   | —   | 97  |
|         | 女子   | —   | —   | —   | 85  |
| H22.05. | 学年全体 | 48  | 57  | 55  | 160 |
|         | 男子   | 26  | 27  | 37  | 90  |
|         | 女子   | 22  | 30  | 18  | 70  |
| H23.05. | 学年全体 | 55  | 47  | 55  | 157 |
|         | 男子   | 25  | 25  | 25  | 75  |
|         | 女子   | 30  | 22  | 30  | 82  |

※平成19年度～23年度の北海道学校一覧参照・筆者作成

### 2. 夕張高校の生徒の進路

図表4 過去5年間の進路別卒業生数

| 年     | 計  |    |    | A 大学等進学者 |    |    | B 専修学校(専門課程) |    |    | C 専修学校(一般課程) |   |   | D 公共職業能力開発施設等入学者 |   |    | E 就職者 |    |    | F 一時的な仕事に就いた者 |   |   | G 左記以外の者 |   |   |
|-------|----|----|----|----------|----|----|--------------|----|----|--------------|---|---|------------------|---|----|-------|----|----|---------------|---|---|----------|---|---|
|       | 計  | 男  | 女  | 計        | 男  | 女  | 計            | 男  | 女  | 計            | 男 | 女 | 計                | 男 | 女  | 計     | 男  | 女  | 計             | 男 | 女 | 計        | 男 | 女 |
| 平成20年 | 77 | 39 | 38 | 25       | 15 | 10 | 31           | 16 | 15 | 2            | — | 2 | —                | — | 18 | 7     | 11 | 1  | 1             | — | — | —        | — | — |
| 平成21年 | 70 | 35 | 35 | 19       | 9  | 10 | 21           | 10 | 11 | 2            | 1 | 1 | 2                | 2 | —  | 25    | 12 | 13 | —             | — | — | 1        | 1 | — |
| 平成22年 | 66 | 32 | 34 | 24       | 10 | 14 | 20           | 9  | 11 | —            | — | — | —                | — | 20 | 11    | 9  | —  | —             | — | 2 | 2        | — | — |
| 平成23年 | 54 | 37 | 17 | 10       | 8  | 2  | 18           | 10 | 8  | 6            | 4 | 2 | —                | — | 18 | 14    | 4  | 1  | —             | 1 | 1 | 1        | — | — |
| 平成24年 | 55 | 25 | 30 | 12       | 9  | 3  | 29           | 11 | 18 | 1            | — | 1 | —                | — | 13 | 5     | 8  | —  | —             | — | — | —        | — | — |

※学校基本調査・高等学校卒業後の進路別卒業生数より筆者作成(平成24年分のみ速報値)

図表5 進路別の割合

| 年     | 大学等進学率 |       |       | 専修学校進学率 |       |       | 就職率   |       |       |
|-------|--------|-------|-------|---------|-------|-------|-------|-------|-------|
|       | 計      | 男     | 女     | 計       | 男     | 女     | 計     | 男     | 女     |
| 平成20年 | 32.5%  | 38.5% | 26.3% | 42.9%   | 41.0% | 44.7% | 23.4% | 17.9% | 28.9% |
| 平成21年 | 27.1%  | 25.7% | 28.6% | 32.9%   | 31.4% | 34.3% | 35.7% | 34.3% | 37.1% |
| 平成22年 | 36.4%  | 31.3% | 41.2% | 30.3%   | 28.1% | 32.4% | 30.3% | 34.4% | 26.5% |
| 平成23年 | 18.5%  | 21.6% | 11.8% | 44.4%   | 37.8% | 58.8% | 33.3% | 37.8% | 23.5% |
| 平成24年 | 21.8%  | 36.0% | 10.0% | 54.5%   | 44.0% | 63.3% | 23.6% | 20.0% | 26.7% |

※学校基本調査・高等学校卒業後の進路別卒業生数より筆者作成(平成24年分のみ速報値)

高校卒業後の進路は、大学進学、専門学校進学、就職が大体3分の1ずつとなっていたが、近年は、家庭の経済状況の厳しさもあり、就職志望者が増えてきている<sup>12</sup>。ここ5年間の、夕張で暮らす若者の進路について、学校基本調査を基にまとめたものが図表3である。夕張から通学可能な学校は非常に限られているため、これらのデータから、毎年数十名の若者が市外へと流出していると推測することができる。

次に、図表4を基に、ここ5年間の夕張市における高校生の大学進学率を見ると、3割弱から3割強であった進学率が2割弱に減少してきていることがわかる。専修学校進学率は、ここ数年でばらつきはあるものの、4～5割と増加傾向にあると言える。就職率は、2～3割弱である(図表5)。大学への進学よりも、専門学校への進学率が高いことに関して、平館(2009)は、「北海道の高校生は、全国的な状況に比べて、一面で専門学校に進学して一定の資格等を得な

ければ、より就職が困難な状況にあるといえる。」(p. 44)と述べているが、このことは、夕張高校の生徒の進路にも当てはまる。

### 3. 外向きの進路指導方針

では、高校生の進路意識の形成に大きく関わってくる、高校の進路指導方針はどのようなものなのか。2008年に実施した、進路指導担当教員への聴き取り調査を基に見ていく。

(夕張高校進路指導担当教員・I先生)

「夕張は、閉ざされたというか、こう、空間としてやっぱり、こう、隔絶された地域ですから。その、じゃあ、札幌に行って、いきなり札幌の、その人馴れした子達と即渡り合えるかっていうとね、どうしてもこう内気で、こう、後ずさりしてしまうような子達っていうのも多いんですね。だから、そこでこううまく適応していくためには、高校卒業した後、もう1つクッションが欲しいということですよ。」

調査時に進路指導担当だったI先生は、「就職は最終手段、えー、就職をこちらから直接、積極的に勧めるっていうことはあまりしていません。」と語っており、経済状況が苦しい中でも何とか進学をとという外向きの進路指導方針を取っていた。I先生は、自分自身でキャリア・コンサルタントの資格を取り、高校生の進路について非常に熱心に勉強をしている。そのため、高校卒業後に新卒で就職する者の離職率の高さ、単純化された労働などの状況を鑑みて、就職はある程度リスクのある選択だと考えている。保護者の方の年取が200~300万円ということが多い中でも、なるべく進学をと生徒を応援し、安易な就職への鞍替えはさせないという。学費負担の少ない国公立大学への入学を勧め、予備校のサテライト授業を取り入れるといった受験対策、各種奨学金の説明などを行っている。また、職業をイメージできるような学部、資格と直結するような学校選びを勧めており、生徒達の実学志向は強く、福祉系や医療系への進学が増えている。

就職志望の生徒に対しては、ハローワークの体験等、早期離職を視野にいたれた教育実践を行っている。また、求人が出ていない企業への求人の開拓も行っている。就職志望者で道外に行く者はまれで、就職志望者のうち、市内就職が3分の1、市外で就職する者が3分の2くらいだという。具体的には、製造業、販売、サービス業への就職が多くなっている。しかしながら、就職についても、市内の給与水準は、都市部に比べるとどうしても低くなるため、外へ出た方が、可能性が広がると考えている。

全体としては、外向きの進路指導方針を取っているが、就職から専門学校、大学への進学へと進路を変更することを、「教師が勧めざるをえない<sup>13)</sup>」という事情が背景にはある。一方で、地元で暮らす若者、地域に根ざした地元企業への実態調査からは、また別の側面が見えてきた。以下で、地元企業、機関の聴き取り調査から明らかになったことについて考察していく。

### Ⅲ. 地元における雇用

#### 1. 農業部門（メロン農家）

夕張市の主産業となっている、農業の中で、主力となっている作物が「夕張メロン」である。全国的にも有名なブランドとなっており、主力産業としての期待が寄せられている<sup>14</sup>。「夕張メロン」をつくるにあたり、重要となってくる組織が「農業協同組合」（以下、農協とする）と「夕張メロン生産組合」である。前者は主に販路の確保、流通、資材の調達などを担当し、後者は責任を持って生産を担うという仕組みになっている。

##### (1) 農業協同組合への聴き取り（2010.06.）より

農協の取り組みで重要となってくるのは、①組合員をどうやって減らさないか＝後継者をどうやって残すか、②収穫したメロンをどうやって有利に販売するかであるという。

夕張メロン組合には、厳しい規約が課されており、組合に加盟しないと、「夕張メロン」の種、段ボールが支給されない。農協の一元集荷になっており、賛同した者だけが組合に加盟できるという仕組みになっている。メロンの中身については、生産者が責任を持つのだが、地域ごとにグループを分け、お互いにメロンを見合っ、悪いところは指摘し合うような体勢を取っている。「こういう組織ですから、自分一人よくてもだめなんです。みんながよくないと。そういった意識で、ちょっとね、自由競争からはちょっと慣行が違うんですけども、みんながよくならないと自分もよくならないと。…例えば、隣の人が、何ぼ立派なメロンつくってもね、私がね、変なのつくって、おいしくないメロンつくって、おいしくないメロンつくったとして、外観はよくても、おいしくない。そんなメロンをつくって入れてしまうと、もうそこで、夕張メロンの評価は落ちちゃうと。ですからこれは、まわりまわって、自分にも返ってくるんですよ。だから、1人よくてもだめだよと。みんながよくないと。みんながちゃんと規律を守って、やらないと。人に迷惑かけるし、自分にも返ってくると。そこがやっぱり重いですよ。」と語っており、品質の維持に対して高い意識を持っていることがわかる。メロンの規格には、秀・優・良の3つがあり、良と秀では、年間を通しての価格が倍近く違う。そのため、品質を上げることで、収益が3～5割上がるといった可能性が十分にあるという。以下は、インタビュー内容の一部抜粋である。

##### （農協・営農推進課 Kさん）

「時代は変わっているんなやっぱりね、状況は変わってくるんですけどもね。その中でも、どうやって、どう工夫して、少しでも優位に販売していくかと、いうのが一つですけども、もう一つはやっぱり、一つ夢を我々が、我々というか親も含めて、子どもに伝えていか。農業ってやっぱりすばらしいんだよと。やったことが、全て自分に返ってくると。いくとも、よくても悪くても自分に返ってくると。…こうやって自由に、自分の思ってる通りのね、メロンを通して、頑張ったことが返ってくるような、そういった喜びを感じるのも一つの人生だなと。何ですかね。そういった、やっぱりね、気持ちって言いますかね、親の、親から子へつながら、何かやっぱりね、その血の中に受け継いでいくのではないかと思うんですよ。」

また、農家の担い手の確保について、農家出身以外の「メロンをつくってみたい」という方

の受け容れを考えているが、現実的には資金的な問題などがあるという。高齢化に伴い、夕張市において農業労働者、雇用労働者を確保できなくなることは目に見えており、夕張市の外部から働きに来てもらうためにも、住宅が必要となっている。その他に、中国からの研修生の受け容れ<sup>15</sup>をしており、2009年度は17名、2010年度は33名を受け容れている。また、日本の国内にいる若年者で、定職を持っていない者が多い中、何人かでも来てくれたらと考えているが、やはり住宅の問題があるという。

## (2) 夕張メロン生産組合、青年部の存在

次に、夕張メロンの生産組合とその下にある青年部について見ていく。夕張メロン生産組合の中で、さらに地区ごとのグループが編成されており、グループごとに、お互いの畑を見てまわったり、何かあった時には支え合う体勢がつけられている。以下で、若手の農家後継者、経営者の者へのインタビュー内容(2010年8月実施)の一部抜粋部分を見ていく。

### (12, メロン農家経営者, 27歳, 男性)

「家によって畑、土の性質が違ったりするから、うちの土はこうだっていうのはけっこう親から、聞いたりして。今までの自分家よりもっといいものをもっと思ったら、近所でうまい、つくり方してんなあっていう人のところに直接聴きに行くのが一番早いかな。(行くと教えてくれる感じ?) ああ、まあ、よっぽど忙しくない限りは。下手したら、よっぽど忙しくても、手止めて教えてくれる人もいるし。」

### (15, メロン農家後継者, 24歳, 男性)

「あの、春先とかに台風並みの低気圧とかって言って、すごい風吹いた時とか、ハウスのビニル破れたりとか、飛んだりとかっていうのがあるんだけど、自分家も危ないのに、その飛んでる人ん家の手伝いに来たりとか、行ったりとかするし。あと、それこそ、集荷してる時に、箱が足りなかったらうちの使っているよとか。そういうのもあるし。困ってる時は大体。そういうの多いかな。」

### (16, メロン農家後継者, 23歳, 男性)

「こら辺だったら、やっぱり畑まわりって言って、みんなで集まって、1件1件どんな状態なのかっていうのを見たりして、そういうのも、勉強になります。やっぱりうちと違うんで。同じ時期でも。」「隣同士の畑だったらちょっと覗いてみたり。どんな風な感じなんだっていうのを、したりしてます。」

メロン生産組合の下にある青年部には、メロン農家の後継者(経営者も含む)で、18歳から38、39歳くらいまでの若手の者、約50人が所属している。全国から視察に来た方が、組合の割合に比して、青年部に所属している若者が多いことに驚くほどだという。青年部では、メロンづくりに関する勉強会、栽培講習会が開かれ、先輩から後輩へと技術の継承が行われている。青年部を通して若い後継者・経営者同士のつながりができ、日頃からメロンづくりに関して相談をする他、余暇を共に過ごす関係性も構築されている。また、メロンづくりを始める際に、歳の近い者がいることが、大きな支えとなっているケースが少なくない。青年部では、地域におけるお祭りへの参加、福祉メロン、冬場の除雪といったボランティア活動も行っており、地域に対する貢献の意識も形成されている。

## インタビュー内容一部抜粋

(13, メロン農家後継者, 28歳, 男性)

「支えになったのは、高校は違ったけど、そのW市の高校に行ったんですけど、僕唯一、同期が一人しかいないんです。夕張に。同級生が夕張に。同級生が、農家をやってる同級生が一人しかいないので。まあ、彼が支えになったというか。まあ、何でも話せますし。何ですか、競争心っていうか、同期なんでやっぱり、同期には負けたくないっていう。…にもなりますね。…その人とはもう全然。小も中も高も違うんですけど。」

(16, メロン農家後継者, 22歳, 男性)

「同級生で農家やってる、同じくメロンつくってる友達いるんですけど、やっぱり同級生いるっていうのは、心強いです。どっちもわからない状態で農家始めたんで。メロンのことなんか知らないんで。やっぱりサッカーとかで集まったりとか。普通に遊びに行ったりしてますね。」「まあ、仕事の手順とかは親から教わったんですけど、メロンを、メロンを育てていくっていうのはやっぱり、青年部って組織の中で、そうですね。栽培講習会とか、そういうもので、メロンを勉強したり。まあ、あとは、身近な先輩から、どうなのかって聴いたりして。今覚えてるところです。」

## 2. 福祉部門

以下で、北海道空知管内に位置する、M町立介護福祉学校、夕張市内の特別養護老人ホームのR園について見ていく<sup>16</sup>。M町の学校は、夕張市から車以外の交通機関を使って通学できる距離に位置する<sup>17</sup>。高齢化率の高い夕張市で暮らす若者にとって、介護福祉士の資格を取り、地元の介護施設で就労するということは、ローカル・トラックの歩みの1つとなっている。

### (1) 空知における福祉職に就く人材の養成 ——M町立介護福祉学校——

1985年頃において、2000年にはわが国の総人口に占める65歳以上の比率(高齢化率)は15.6%に達すると推計されており、北海道の高齢化も増加の一途をたどる傾向にあった。そのような中、社会においては、今後ますます増加する高齢者に対する福祉施設の拡充整備と共に、在宅福祉、デイ・ケアや短期入所などの施設機能の近代化や、介護職員の養成が強く望まれる時代であった。1987年5月に「社会福祉士及び介護福祉士法<sup>18</sup>」が制定されたことに基づき、介護福祉士を養成するため、全国に先駆け、M町立介護福祉学校は、1988年4月に第1期校として開校された。第1期校25校の1校(北海道内にもう1校開校)として全国でも珍しい町立校として開校した。M町立介護福祉学校は、平成22年度(2010年度)までで1,771名の卒業生を輩出しており、多くの卒業生達が、全道の老人介護施設等で活躍している。

学生の卒業後の進路について、北海道空知管内で唯一の公立の介護福祉学校として、地元で福祉職に就くことを望む姿勢でいる。実際に空知管内での就職が多いが、とりわけ、夕張出身の学生は、地元へ戻っている者の割合が、他地域出身の者に比べてかなり高いという<sup>19</sup>。

(M町立介護福祉学校・事務局長)

「全道にまあ、そういった介護福祉士を送り込むっていうことよりも、このエリアですね、に、そういった学生を出そうというような考えの方が現在は強いかもしれないですね。…うちの考え方としては、この辺(空知管内)に送り込むという形ですね。地元で必要な介

「護福祉士の数って決まっていますんで、まあ、町内、近隣に送り込みたいという形ですね。」

カリキュラムに関しては、介護の高い技術を持った人材を育成したいという思いから、通常1,800時間設定すれば国に認可されるところ、2年間で2,129時間の授業数を組んでいる。各学校で単独で組むことのできるカリキュラムの中に、実習の指導や演習、情報処理等の授業を組んでいる。また、2年間で8回以上、老人介護福祉施設等でボランティアを行うことが義務付けられている。学校での2年間を通して取得できる資格は、介護福祉士、レクリエーション・インストラクターである<sup>20</sup>。女子の割合が全体として高いものの、近年は男子学生の割合も増えてきている<sup>21</sup>。

M町立介護福祉学校は町立であり、学費の負担が小さく、介護福祉士という資格が取得できること、就職率が100%であることもあって、空知近郊の高校生にとって、介護職に就くというルートを歩む上で重要な役割を果たしている。空知管内の出身者が、入学者の6割以上を占めており、経済的な事情から、自宅から通学する学生の割合が高くなっている。また、学校には女子寮があり、通学の難しい地域から来ている生徒が入寮している。学生支援機構の奨学金の他に、「介護福祉士等修学資金<sup>22</sup>」という制度があり、学費に相当する160万円近くの資金を貸与してもらうことができる。所得の低い家庭、母子家庭の学生が多く、学生支援機構の奨学金と「介護福祉士等修学資金」の両方を借りる学生も多いという。そのような中で、奨学金、修学資金を自分の力で借りて、自立しつつ卒業していく者も少なくない。

(2) 福祉事業所—特別養護老人ホームR園を事例に一

65歳以上の高齢者の占める割合が4割を超える夕張市では、老人介護施設の数が多い。M町立介護福祉学校の卒業生が、毎年就職する施設の1つに、夕張市内にある特別養護老人ホームのR園がある。R園は、夕張市で最も大きな介護施設である。従業員の中に、夕張高校、M町立介護福祉学校のOB・OGが多い施設である。R園では、特別養護老人ホームの他に、グループホーム、デイサービス、居宅事業も行っている。

R園の法人全体の人員配置を正規・非正規の別、年代・性別ごとにまとめたものが図表6である。30代、40代以降の世代では、女性の占める割合が高いものの、20代では男性の比率が高くなってきていることがわかる。背景としては、介護福祉学校に通う学生の構成比が変わってきたことと共に、利用者のニーズが多様化してきていることもある。力仕事求められる場面、外出の際の車の運転など、男性が必要とされるようになってきているのだ。R園の職員のうち、72名の者が介護職員として特別養護老人ホームに勤めている。72名中50名が介護福祉士の資格を持っており、18名がヘルパー2級を所持、何も資格を持っていない者は4名である。全体の7割近くの者が介護福祉士の有資格者である<sup>23</sup>。

図表6 R園の人員配置

| 年代別   |    | ～19歳 | 20～24歳 | 25～29歳 | 30～34歳 | 35～39歳 | 40～44歳 | 45～49歳 | 50～54歳 | 55～59歳 | 60歳以上 | 計   |
|-------|----|------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|-----|
| 正規職員  | 男性 | 0    | 6      | 10     | 0      | 4      | 3      | 0      | 0      | 2      | 0     | 25  |
|       | 女性 | 0    | 6      | 3      | 1      | 4      | 2      | 7      | 7      | 7      | 0     | 37  |
| 非正規職員 | 男性 | 0    | 3      | 0      | 0      | 0      | 0      | 0      | 0      | 2      | 2     | 7   |
|       | 女性 | 2    | 2      | 5      | 1      | 3      | 4      | 1      | 7      | 7      | 16    | 48  |
| 計     |    | 2    | 17     | 18     | 2      | 11     | 9      | 8      | 14     | 18     | 18    | 117 |

※平成22年4月時点での人員配置

R園で働く若年層へのインタビュー調査からは、介護福祉士という専門職として働くやりがい、高齢者のための町づくりやケアの視点からの語りが見られた<sup>24</sup>。

#### インタビュー内容一部抜粋

(①, R園勤務, 26歳・男性)

「今は本当に高齢化も進んで、歩いていると、お年寄りの方ばかりなんで、ほんとにお年寄りの方が生活しやすい環境になればなと思います。それこそ買い物するところだって、家から歩いて何十分とかバスに乗らなきゃならない、病院まで行くのも送迎バスがあっても自分で行けない人もいてってこと。」

(③, R園勤務, 21歳・女性)

「やっぱ、利用者さんの笑顔、見るのが大切、だから自分達も笑顔で、働けたらいいなって。」

(④, R園勤務, 25歳・女性)

「ここに入ってるってことは、自分にできない部分だとかあるから、入ってきてるわけじゃないですか。もしかしたら自分は入りたくなかったけど、あの、家族がどうしても難しく、入らざるを得ない人もいるだろうし、様々だと思うんですよ。なので、こう、そういう人達にとって、こう、こういうところに入って、こう『ああでも、思ってたのと違ってよかったな』って思えるような、そういうケアとかができていければなあとは思ってますね。」

(⑤, R園勤務, 29歳・女性)

「こういう仕事柄ですけど、やっぱ福祉を重視していくような町にしていかないと、やっぱり高齢の方がもう本当主なので、40、高齢化率40何%で、北海道1位で、夕張が。なってるくらいなんで、そこを利点としてというか、福祉を活かした町づくりっていうのをやっていければいいのかなあっていうのは、ありますね。」

### 3. 企業部門

次に、2010年並びに、2012年に行った、夕張市内にある製造業の企業への聴き取り調査を基に、地元における若者の雇用の潜在性について検討する。筆者が調査を行った企業のいずれも、旧産炭地であって、閉山に伴う市の企業誘致をきっかけに、夕張市で会社をスタートさせている。また、物流の関係で苫小牧にある港に近いという利点からの立地も見られた。そのため、市と直接結びついた産業というわけではないが、逆に夕張市においても雇用の場を提供することができている。

#### (1) 市内における企業

夕張市内には、いくつかの特殊需要のある企業があり、夕張高校の卒業生や一度市外へ出てUターンする者にとっての雇用の場となっている。高校生で市内に就職する者の進路として、進路指導担当教員の方からお聴きした、市内にある4社へ聴き取り調査を実施した。企業の概要は図表7の通りである。

Z社は、夕張市のM地区に位置し、従業員数は205名、年商23億円で、夕張市では規模の大きい企業であり、高校卒業後にすぐに就労する者も多い。主に、腕時計部品の製造並びに販売

図表7 調査対象の企業概要

| 会社名 | 調査時期    | 従業員数           | 事業内容             |
|-----|---------|----------------|------------------|
| Z社  | 2010年6月 | 205名           | 精密部品の製造ならびに販売    |
| T社  | 2010年6月 | 43名 (全国で180余名) | 道路関連の製品の製造ならびに販売 |
| O社  | 2012年2月 | 15名 (全国で110余名) | 楽器等の木製品用の木の切削    |
| H社  | 2012年3月 | 235名           | 冷凍食品の製造          |

を行っている会社で、全国規模の親企業の部品を扱っている。従業員が205名近くいる中で、正社員が121名となっている。全体では、女性が62名で

ある。入社時に1週間ずつ社内研修、社外研修が行われている。技能の習得にかかる期間は職場によって異なり、検査の工程は3カ月から6カ月で技能を習得できるが、自動旋盤の工程では、使用している機械が古く、勘が必要になってくるため、1年、2年経ってもなかなかうまくできない者もいるという。

T社も全国規模の親企業がある上で、生産を担っている会社である。全国規模では約40億、北海道ブロックでは約8億の売上高を計上している。夕張工場には調査時点で43名が勤務しており、そのほとんどが地元採用である。従業員の平均年齢は40歳となっているが、ここ数年は若年者の雇用を積極的に行っている。夕張高校卒業者の採用率が非常に高い。

O社は、楽器関連などの木製品用に、原木、丸太から切削を行い、合板にするという仕事を担っている。本社が本州にあり、加工された合板は本社に送られるようになっている。従業員は15名で、男性が11名、女性が4名である。一番若い従業員の者が23歳で、20代はその他に2名、その他は30代、50代、60代と、幅広い年齢構成になっている。ほとんどが正規職員で、パートは以前勤めていた者2名(男性1名、女性1名)である。60代の方は定年延長をして、6年雇用されることになっている。仕事は、熟練の方と一緒にやっていく中で、仕事をこなせるようになるのに5年、満足のいくものができるようになるのに5~10年くらいかかるという。

H社は、冷凍食品の輸入、製造および販売を行う会社で、全国規模の食品会社の子会社である。全国の市販用の冷凍食品シェアでは、5.5%を占めている。H社全体では、従業員数が687名、夕張工場では235名である。調査時点で、社員が54名、準社員(60歳未満)が107名、定時社員(60歳以上)が52名、派遣社員が3名、実習生(中国から受け容れ)が19名である。社員の平均年齢は36.3歳、準社員の平均年齢は44.5歳となっている。

夕張市内の製造業と一言で言っても、技能形成に時間をかけて熟練工を育てているところ、小規模の事業所から従業員数が200名を超えるところまでと、バリエーションがあることがわかる。

(2) 雇用の潜在性

では、夕張における労働力人口はどのくらいなのだろうか。平成22年の国勢調査の結果を見ていくことにする。夕張市における15歳以上の人口は、10,203名(男性4,816名、女性5,387名)のうち、5,111名(男性3,011名、女性2,100名)、就業者数は4,660名(男性2,676名、女性1,984名)となっている(図表8)。

図表8 夕張市の労働力人口(15歳以上・男女別)

| 地域・男女 | 15歳以上人口総数 | 労働力人口 |      |      |         |           |     |       | 非労働力人口 |
|-------|-----------|-------|------|------|---------|-----------|-----|-------|--------|
|       |           | 総数    | 就業者数 |      |         |           |     | 完全失業者 |        |
|       |           |       | 総数   | 主に仕事 | 家事のほか仕事 | 通学のかたわら仕事 | 休業者 |       |        |
| 夕張市   | 10203     | 5111  | 4660 | 3978 | 620     | 11        | 51  | 451   | 5091   |
| 男性    | 4816      | 3011  | 2676 | 3011 | 2596    | 49        | 8   | 23    | 335    |
| 女性    | 5387      | 2100  | 1984 | 1382 | 571     | 3         | 28  | 116   | 3287   |

※平成22年国勢調査 産業等基本集計結果 第7表 労働力状態(6区分)、男女別15歳以上人口 参照・筆者作成

産業別の就業者数は、図表9の通りである。第3次産業に就いている者の割合が高く、中でも、卸売業、小売業(552名)、医療、福祉(476名)、運輸業、郵便業(226名)が多い。第2次産業では製造業(654名)、建設業(517名)に就いている者が多い。第1次産業では、農業・林業に就いている者が640名で、メロン農家の者の割合が高い。

図表9 産業(大分類), 男女別 15歳以上就業者数 - 北海道一

(単位:人)

| 地域・男女 | 15歳以上就業者総数 | 第1次産業   |            |                 | 第2次産業       |               |          | 第3次産業 |         |                   |                |         |
|-------|------------|---------|------------|-----------------|-------------|---------------|----------|-------|---------|-------------------|----------------|---------|
|       |            | 総数      | 農業・林業      | 漁業              | 総数          | 鉱業、採石業、砂利採取業  | 建設業      | 製造業   | 総数      | 電気・ガス・熱供給・水道業     | 情報通信業          | 運輸業、郵便業 |
| 夕張市   | 4660       | 640     | 640        | —               | 1172        | 1             | 517      | 654   | 2848    | 31                | 8              | 226     |
| 男     | 2676       | 303     | 303        | —               | 867         | —             | 469      | 398   | 1506    | 28                | 6              | 202     |
| 女     | 1984       | 337     | 337        | —               | 305         | 1             | 48       | 256   | 1342    | 3                 | 2              | 24      |
| 地域・男女 | 第3次産業      |         |            |                 |             |               |          |       |         |                   |                |         |
|       | 卸売業、小売業    | 金融業、保険業 | 不動産業、物品賃貸業 | 学術研究、専門・技術サービス業 | 宿泊業、飲食サービス業 | 生活関連サービス業、娯楽業 | 教育、学習支援業 | 医療、福祉 | 複合サービス業 | サービス業(他に分類されないもの) | 公務(他に分類されないもの) | 分類不能の産業 |
| 夕張市   | 552        | 38      | 19         | 30              | 323         | 217           | 156      | 476   | 99      | 402               | 271            | —       |
| 男     | 241        | 18      | 14         | 23              | 137         | 95            | 67       | 121   | 55      | 301               | 198            | —       |
| 女     | 311        | 20      | 5          | 7               | 186         | 122           | 89       | 355   | 44      | 101               | 73             | —       |

※平成22年国勢調査 産業等基本集計結果 労働力状態(6区分), 男女別15歳以上就業者数 参照・筆者作成

夕張市内にある製造業の企業4社に調査を行って明らかになったのは、地元における雇用の潜在性があるにも拘わらず、労働力を市内で確保できないという問題である。以下は、インタビュー内容の一部抜粋である。

(Z社, 精密加工部部长, Bさん)

「本当は雇用を何とか、地元から採りたいっていうのはあるんですけど、ほとんど無理になってますね。(どうしてでしょう?) 高校生は応募は来ない、パートさんももう、年輩の方が多すぎてちょっと、細かい仕事ができないとか。結局今は、M町とかN町とかL市とか、そういうところから来てるんですね。新卒もそうですけど。で、それに合わせて、今度住宅が困るとか。いろいろな問題ありますね。」

(H社, 副工場長, Cさん)

「仕事が忙しくなってくると、当然、あの、派遣会社さんをお願いしたり、それからあの、新聞の折り込みチラシ等で募集するんですけども。なかなか、夕張市内っていうのは人がいないんですね。あの、ご存じのようにデータ的には1年前のデータ、2年前のデータかな。高齢者、65歳以上の高齢者が、47%くらいの町なものですから、今もう、限りなく50%に近いのかなと思ってますけど。結局、65歳以下の方が半分しかいませんよっていう町なんで、ほんとに市内で人をお願いしたいと思っても、人出がないっていうのが実態ですね。」

(O社, 工場長, Dさん)

「まあ、景気がよくなってね、私達としても人数が不足ということになれば、極力地元採用ということにしたいなあという風には思ってるんですけどもね。」

企業としては、地元で雇用をとという姿勢でいるが、人口流出が進み、労働力人口が著しく低下している夕張市において、労働者を確保するのは難しい問題になってきている。そのため、近隣の多市町村から採用せざるを得なくなっているというのだ。O社の場合、リーマンショッ

クの影響もあり、雇用をしたくてもなかなか難しい状況にあるものの、他の3社は、新規採用に積極的な姿勢である。T社のEさんは「使えそうな人材は紹介してください」と夕張高校にお願いしており、毎年新卒で1、2名は採用に至っているという。また、Z社のBさんは「高校生、夕張高校も多分、就職希望者10数名くらいは毎年いるとは思うんですけども、何でうちに来ないのかなあと。…うち、こんな近くにあるのに。近くにあるんだから、生徒連れてくるなりしてもいいとは思うんですけど。」と語っており、雇用はあるのに、人が集まらない現状だという。

図表10 夕張市の昼間人口及び夜間人口

(単位：人，%)

|       | 夜間人口<br>A | 流出人口 B    |      | 流入人口 C    |      | 昼間人口<br>D=A+B+C | 昼夜間<br>人口<br>比率<br>D/A<br>×100 |
|-------|-----------|-----------|------|-----------|------|-----------------|--------------------------------|
|       |           | 自市内<br>他区 | 他市町村 | 自市内<br>他区 | 他市町村 |                 |                                |
| 平成7年  | 17116     | —         | —    | —         | —    | 16923           | 98.9%                          |
| 平成12年 | 14791     | —         | 528  | —         | 656  | 14919           | 100.9%                         |
| 平成17年 | 13001     | —         | 451  | —         | 712  | 13262           | 102.0%                         |
| 平成22年 | 10922     | —         | 368  | —         | 892  | 11446           | 104.8%                         |

※平成12年・平成17年・平成22年国勢調査結果 職業等基本集計結果 従業地・通学地集計結果参照・筆者作成

企業の聴き取りから明らかになったのは、雇用はあるのに地元の人材が不足しているということである。そこで、夕張市における昼間人口と夜間人口を見てみることにする(図表10)。これを見ると、ここ数年、市外へ通勤や通学で流出する人口が減少傾向にあるのに対し、市外から昼間に夕張市内に流入している人口の割合は増加傾向にあることがわかる。平成22年には892名が流入しており、昼夜間人口比率が104.8%となっている。一概には言えないが、これらのデータからも、雇用の需要がありつつも、市内で労働力を供給することが難しいことがわかる。

#### IV. 被雇用者のための生活環境の改善の必要性—住宅問題、税負担—

中西(2005)は、「ローカル・トラックの潜在的可能性に着目し、可能性を現実性に転化させるためには、生活のリージョナリズム(生活・労働における地域単位の自立構想)をシステムとして維持しうる『社会経済』の実現が不可欠である。そしてこの意味では、社会的自立像組みかえの一環に『社会経済』構想の具体化が含まれていなければならない<sup>25)</sup>。」と述べている。地域経済の衰退する地方都市においてはなおのこと、「社会経済」の構想をどう具体化し、「生活のリージョナリズム」をシステムとして確立することが可能かという課題は非常に大きなものである。夕張市の企業・機関への聴き取り調査から、雇用の潜在性と共に、人口回復の糸口として明らかになったことは「住宅問題」である。以下は、インタビュー内容の一部抜粋部分である。

(農協・営農推進課, Kさん)

「下のM町とかから、通ってこられる方いるんですよ。朝の、朝晩の出勤、退社ラッシュの時間ってなると、けっこうね、朝は車上がってくるし、夕方は車下がってくというね。M町はけっこうね、あそこを見ると、新しいアパート、マンションみたいの建ってます。いっぱいね。夕張市内は、全くないです。」「どんどん夕張市内に、同じね、働くんであっても、市外から来て働くんでなくて、夕張市内に住宅持って働いてくれるんならね、もっともつと市としてもいいと思うんですけどね。考えてる、まあ、その辺は考えてるようすけどね。住宅問題とかね。あと、財政破たん、この厳しい中でね、何とかその住宅問題も解決したいという風に言ってますしね。」

(H社, 副工場長, Dさん)

「まあ、外部から、入ってきやすい町。結局住宅もですね、非常に戸数がいっぱいあるんですよ。市営住宅っていうか、昔の北炭時代の炭住っていうんですかね。いっぱいあるんですけど、人が住めるような住宅は少ない。手入れされてないっていうことですね。ですから、逆にそういったものを人が住めるような形にしていくことで、それで、例えば今うちの工場も、約3割以上の方が、夕張市外から来てますんでね、そのうちの何%かでも、夕張に住んでもらう。本人達も住めるなら住みたいって希望してる人も何人かいますんでね。」「労働者の方も、通勤時間が短くなって、それで、そういった冬場の危険から逃れられるのと、夕張に住みたいっていう方が何人か出てくると思うんですよ。それによって、人口の流出が留められればですね、段々衰退していつている町の商店街なんかも、少しずつ活性化してきて、逆にそういった意味で、住民税も含めて、それから消費税等も含めてですね、町が活性化してくるんじゃないですかっていう話は前から何度かさせていただいています。それとあとですね、ここの夕張市内で子どもを産めないんですよ。産婦人科がないんですよ。ですから、若い世代が住めるような形で、そういった病院の方の誘致も、ある程度していかなくちゃいけないのかなと。」

このように、財政再生下にある市では、インフラ整備が難しい中、住宅の問題が大きく浮き彫りとなっている。夕張で暮らしていく中で最も根幹となる、住居の整備が進んでいないのである。炭住であったこととも関係するが、市営住宅の多くは、未だにお風呂が備え付けられていないという問題もある。さらに、市の税金、公共料金の高さは、被雇用者にとっての負担を大きくする。

しかしながら、夕張で暮らす若者たちの生活を見ていくと、決して楽観的ではないものの、「地元つながり」や職業を通じた自立、家族の形成などを通じた、希望的な萌芽を見ることができ<sup>26</sup>。夕張で暮らし続けることに、希望がないわけではないと筆者は考える。「これからの夕張」を考える際に、若者の定着を可能とするような町づくりが必要とされている。

## V. おわりに

### 1. 高校の進路指導方針と地元雇用の潜在性のギャップ

夕張市における企業・機関への聴き取り調査、ならびに各種統計から、18歳以上の人口流出

が非常に多いものの、地元における雇用の潜在性を見ることができた。また、市の主産業であるメロン農家、福祉職に就くというルートも、地元における雇用としては非常に重要である。外向きの進路指導方針を取っている高校は、「地元においても仕事がない」という認識を持っており、生徒達の将来を考えた時に、可能性が広がるのは外へ出ること、という考え方を取っている。生徒側も、進路指導によって、就職から進学へと意識を持ちかえている場合が少なくない。

しかしながら、専門学校や大学へ行く生徒の多くが各種奨学金を利用しており、背負うリスクは決して小さくない。そのような中で、地元で自立をしていくというルート、高校卒業後に進学し、Uターンをするというルートを描くことの難しさをどのように考えていったらよいのだろうか。

## 2. 地方における高校教育への示唆

吉川(2001)は、島根県の若者を対象とした調査研究を基に「ローカル・トラック」論を打ち出しており、「トラックの排他性について論じるとすれば、参入・退出の自由な大都市圏ではなく、不可逆的な人口流出の実態のある地方のトラックキングがより重要な論点となる。」と述べている<sup>27</sup>。また、吉川(2001)は、地元を離れる若者の背景としての「大衆教育社会の学歴観」についても触れている。筆者が調査対象としている夕張においても、やはり、進学への志向性が極めて強く見られ、その背景には「大衆教育社会の学歴観」があると考えられる。

進路選択において「地元に残る・戻る」ことは避けるべき選択肢なのだろうか。むしろ、「地元に残る・戻る」という選択肢に展望を持つことができるようにするために、何ができるかを考えるべき時代なのではないか。尾川(2011)は、「高等教育機関の極端に少ない『地元』にとどまる若者は、大学進学のために流出する『地方エリート』を見送り、無業でなくとも親と同様『地方ノンエリート』としての生を引き受ける。」「そうした構造によって若年労働力が供給され、地域の労働力需要が充足され、かたちを変えながら職人世界の規範や文化が存続しうる現実が地方にはある。特定の働き方とキャリアを強いるローカルな社会状況を所与のものとするならば、再生産を脱『問題』化し、若者が『地元』を豊かに力強く生きてゆくための議論が求められる。」と述べているが、筆者も同様に考える。近年、若者の移行問題に関する研究において、「第二標準」や「ノンエリート」<sup>28</sup>といった観点からの考察が見られるが、地方都市における後期中等教育、進路指導について考える際に重要な論点である。

本稿では、超少子高齢社会、財政破綻の自治体である夕張市を事例としているが、人口流出の問題は全国的に起こっている。地元における雇用の潜在性、生活面でのインフラ整備等の課題も多いが、「地元で生きる」ということに、学校教育も目を向けていくことが必要だと筆者は考える。

## 注

- 1 夕張高校の生徒の進路、地元志向については、筆者の修士論文で扱っている(窪田 2009)。
- 2 佐々木(2009), pp. 14-15参照。
- 3 窪田(2012)

- 4 本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C)(研究課題「地方ノンエリート青年の社会的自立と進路指導・キャリア教育の改善に関する研究」)、研究代表・浅川和幸、研究課題番号22530904に基づいて行った。
- 5 保母(2007), pp. 12-30
- 6 2010年に入り、財政再生の計画期間は平成41年度までの21年間(実質17年間)、赤字解消額が2011年度より322億円と公表されている。また、市営住宅の整備の必要性等から、再生計画の変更を国に申し出ており、再生計画に修正が見られる。(夕張市役所HP参照)
- 7 斎藤(2007)参照。
- 8 昭和36年11月13日法律第219号。
- 9 保母(2007), p. 29
- 10 浅川(2011)参照。
- 11 『北海道新聞朝刊』2008/03/04, 1ページ参照
- 12 平成24年分のデータは速報値であるため、就職者の割合が低くなっているが、実際にはこの数字よりも小さくなると予測できる。
- 13 平館(2009), p. 46参照。
- 14 松谷(2009)は、集落の再生を考えるうえで、「農業の維持拡大」が集落再生の基軸になると述べている。
- 15 中国から受け容れている研修生については、住居として、市の市営住宅が提供されている。
- 16 2012年2月に実施したM町立介護福祉学校事務局長へのインタビュー調査、2010年6月に実施したR園の職員の方へのインタビュー調査を基にして、以下で説明する。
- 17 車以外の交通機関を使って、夕張から通学できる高等学校以上の教育機関は、M町立介護福祉学校のみである。
- 18 昭和62年5月26日法律第30号。
- 19 2012年2月実施のM町立介護福祉学校、事務居局長へのインタビューより。
- 20 調査時点(2012年2月)では、卒業時に国家資格として介護福祉士の資格を取得できるが、3年後からは、国家試験を受験し、合格した者に資格が与えられるよう、法改正が行われている。
- 21 施設の入所者の割合も女性と男性の割合が大体7:3で、女性の方は、男性に比べてもらうことに抵抗感を感じる方が多いという背景もある。同一性の方に介護してもらうというのが基本とのことである。しかしながら、高校を卒業してすぐに就職することが難しくなっている中、高校卒業以上の資格が社会的に要求され、男子でも介護の道を歩むという者が近年増えているという。
- 22 へき地で何年間か介護福祉士として勤めると、借りた資金を返済しなくてよいという制度。
- 23 介護保険制度にはサービス体制強化加算という制度があり、介護福祉士の有資格者が全体の50%以上であれば、加算の対象とされるという背景もある。
- 24 2010年8月末実施のインタビュー調査より。
- 25 中西(2005), p. 248
- 26 窪田(2012)参照。
- 27 吉川(2001)は、『ローカル・トラック』とは、それぞれの地方の出身者が、アカデミックな進路選択とは別次元のものとして、自らの地域移動について選択していく進路の流れである。(p. 223)と述べている。
- 28 中西(2004)、斎藤・佐々木・田中・依田編(2009)、中西・高山編(2009)、児美川(2009)参照。

## 参考文献

- ・浅川和幸, 2011, 「『財政再建団体』指定以降の夕張市の現状—高齢者調査を手がかりとして—」, 『教育学の研究と実践』(第6号), 北海道教育学会, pp. 5-12
- ・尾川満宏, 2011, 「地方の若者による労働世界の再構築—ローカルな社会状況の変容と労働経験の相互連関—」, 『教育社会学研究』(第88集), pp. 251-71
- ・吉川徹, 2001, 『学歴社会のローカル・トラッカー—地方からの大学進学』, 世界思想社
- ・窪田玲奈, 2009, 「地方における高校生の将来展望と地元志向—地に根づくこと／飛び立つこと—」, 北海道大学大学院教育学院・修士論文
- ・窪田玲奈, 2012, 「“地方の地方”における若者の『地元つながり』—夕張高校OB・OG調査を基に—」, 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』(第115号), pp. 17-56
- ・児美川孝一郎, 2009, 『権利としてのキャリア教育』(若者の希望と社会2), 明石書店
- ・佐々木英一, 2009, 「序章 現代における職業指導の役割と課題—ノン・キャリア教育の構築」, 齊藤武雄・佐々木英一・田中善美・依田有弘編, 『ノンキャリア教育としての職業指導』, 学文社
- ・斎藤誠, 2007, 「夕張は苦しみの果てに 『閉山地帯』の地域史」, 自治研中央推進委員会編, 『月刊自治研』(vol.49, no. 578, 特集 夕張が問いかけるもの), (株)自治労システムズ 自治労出版センター, pp. 54-63
- ・自治研中央推進委員会編, 2007, 『月刊自治研』(vol.49, no. 578, 特集 夕張が問いかけるもの), (株)自治労システムズ 自治労出版センター
- ・中西新太郎, 2004, 「第12話 『もう一つの社会への萌芽』」, 『若者たちに何が起きているのか』, 花伝社, pp. 223-36
- ・中西新太郎, 2005, 「青年層の現実 に即して社会的自立像を組みかえる—安心して生き働ける最低限の保障を」, 『未来への学力と日本の教育⑤ ニート・フリーターと学力』, 明石書店, pp. 230-57
- ・中西新太郎・高山智樹編, 2009, 『ノンエリート青年の社会空間—働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』, 大月書店
- ・保母武彦, 2007, 「I 夕張問題とは何か」, 保母武彦・河合博司・佐々木忠・平岡和久, 『夕張 破綻と再生—財政危機から地域を再建するために—』, 自治体研究社, pp. 12-30
- ・平館善明, 2009, 「第1章 青年の進路の実際 1.(4) 北海道の高校生の困難な進路状況」, 齊藤武雄・佐々木英一・田中善美・依田有弘編, 『ノンキャリア教育としての職業指導』, 学文社, pp. 41-48
- ・松谷明彦, 2009, 『人口流動の地方再生学』, 日本経済新聞社

# The Gap between Potentiality of Local Employment and Academic and Career Counseling

Based on the Investigation for the Local Companies and Associations

Rena KUBOTA

## Abstract

The purpose of this paper is to consider the latency of local employment and the gap of academic and career counseling in Yubari. It's based on the investigation for the local companies and associations.

While there is a fact of thinking that local companies want to accept the youth of Yubari which is local as much as possible, the high school has taken the outward academic-and-career-counseling plan. I think that the support is also required from another angle about the course of returning or remaining in local. Then, it suggests about the academic and career counseling in local areas, paying its attention to viewpoints in precedence research, such as "the second standard", the "non elite", and the "non career." "Remaining or returning in local" in course selection is saying a choice which should be avoided? Rather, isn't it a time which should consider what is made in order to be able to have a view in the choice of "remaining and returning in local"? Yubari is the self-governing body under financial reproduction. Moreover, Yubari is a town of super-low birthrate advanced age. The problem of the population outflow has arisen nationally not only in Yubari. There are many subjects, such as the latency of the employment in local and an infrastructure building in respect of a life. However, I think that it required for "living locally" for school education to also turn eyes.